

No. 502【2022年4月22日配信】

出土遺物の実測 (担当: 児玉大成)

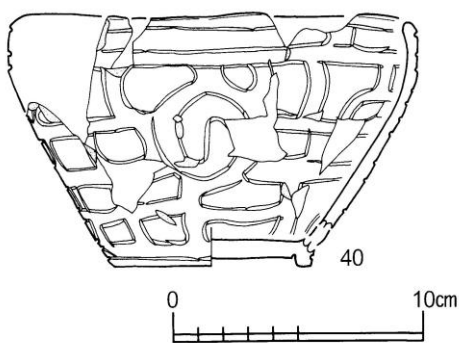
こんにちは。文化遺産課の児玉です。

発掘調査で出土した遺物は、洗浄・注記・接合後に、その記録を後世に残すため「実測図」を原寸(実物大)で作成します。実測にあたっては、出土遺物を正確に図に示すとともに、整形技法や文様などの情報を読み取り、わかりやすく表現する必要があります。

土器の実測には、以下のような様々な道具を用いて作業します。

- ①方眼紙：1mm単位の方眼紙を使用します。
- ②三角定規・物差し：土器の大きさに合わせて、大小の三角定規を使い分けます。三角定規を土器の両側に垂直に立て、水平に物差しを当てながら5mm～1cmごとに縦方向に動かし、土器外面との間の数値を測り、その測点を方眼紙に記入することで、土器の形や文様などを方眼紙に写していきます。
- ③チャコペン：手芸などでも使われるチョークのようなペンです。実測しやすいように、わかりにくい文様などをなぞり、はっきりさせるために使用します。
- ④真弧(マコ)：一列に並んだ細くて薄い竹の板を、2枚の木板で挟んだ型どり用の道具です。土器の外面に接触させると、無数の竹の板が、その形のとおりに変形し、それを方眼紙の上に置いて鉛筆で写し取ります。
- ⑤キャリパー：土器の厚みを測る金属製の道具です。ノギリクワガタのハサミ(大アゴ)のように、大きく内側に湾曲した形をしており、その先端のとがった部分で土器を挟むと、逆側に位置する目盛りに厚さが示されます。
- ⑥ディバイダー：土器の厚さや文様間の幅などを測る道具で、コンパスのような形状をしています。両脚とも針先になっており、2点間の寸法を写し取ります。

これらの道具を駆使しながら書き上がった実測図は、ロットリングと呼ばれる製図用のペンで太さを変えながら、トレーシングペーパーという用紙にトレース(清書)します。トレースは、線が震えたり、間違えてしまうと修正が難しいので、熟練した技術と慎重な作業が求められます。最近では、手書きではなく、実測図をスキャンしてパソコン上に取り込み、デジタルでトレースをすることもあります。デジタルトレースは、間違っても修正ができますし、着色や加工など幅広い利用も可能です。



土器の実測図

(稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ第264図40,
青森市教育委員会 2003)

こうして描かれた実測図をもとに、型式名や特徴、所見等を記載した文章に加え、観察結果(例えば、縄文は右撚りなのか、左撚りなのかなど)をまとめた表を考古学の専門知識を持った職員が作成し、過去に出土した資料との比較や科学分析結果を織り交ぜながら『発掘調査報告書』を編集します。この報告書は、青森県立図書館や青森市民図書館に収蔵されているほか、インターネットを通じ、閲覧して頂けます。